

学位論文題名

毛奇齡研究

—朱子學批判とその時代—

学位論文内容の要旨

清代の代表的学問が、古典の訓詁・音韻などについての実証的な研究を行う、いわゆる考証学であることは周知のことに属する。毛奇齡(1623～1713)は、同時代の顧炎武(1613～1682)や閻若璩(1636～1704)同様、清代の実証的な学問の先駆者の一人として知られる学者である。また毛奇齡は、清代における有力な朱子学批判者の一人であり、朱子学の経書解釈をしばしば非難したことで知られている。

本論文は、毛奇齡の学術と時代思潮との関連性を解明することに主眼を置いたものである。具体的には、朱子学が科挙で出題される経書解釈の基準であったという事実に着目し、主として科挙の受験者の実態に関する検証を通して、毛奇齡の朱子学批判の時代的意義、及び清初の時代思潮(朱子学の盛行、及び陽明学批判の流行)の実状について考察を加えている。

第一章 黄宗羲・萬斯大の所謂「以経解経」について

第一章では、本論文の導入として、「以経解経」という主張を検討している。該句は清朝考証学の方法論を示すものとして有名であるが、その含義と来源については、従来、十分な考察がなされていない。本章は、清初の黄宗羲(1610～1695)・万斯大(1633～1683)の提言を取上げて、上記の問題を考察するものである。

本章では先ず、「以経解経」という語句は、「特定の経書解釈に固執しない」という学問上の立場を表わしていることを指摘している。更に元代の学者である黄沢(1260～1346)に「以経証経」という類似の語句が存することに注目し、万斯大・黄沢の経書解釈の方法を比較検討することなどを通して、「以経解経」という語句が黄沢の所説に由来することを明らかにしている。また、黄宗羲の言説から窺える時代背景を分析することにより、「以経解経」という語句は、實は科挙の受験者が朱子学に固執する態度を批判したものである、という点も指摘している。

第二章 『論語集注』批判とその時代的意義—『論語稽求篇』と清初科擧—

第二章では、毛奇齡の著作『論語稽求篇』における朱子学批判は如何なる時代的意義を有するのか、という問題を扱っている。『論語稽求篇』の自序によれば、毛氏の朱子学批

判には、科挙に及第することを目的とした学業、いわゆる挙業に対する反撥という側面が存する。また、時代背景について先行研究は、清初、科挙における朱子学遵守が強制されたことを指摘している。本章は、清初の科挙政策の影響、及び清初の科挙受験者の実態に着目し、上記の問題に考察を加えたものである。

本章では先ず、『論語稽求篇』における朱子学批判を検討することにより、毛氏の批判の根柢には、「以経解経」という語句で表現される所の、「特定の注釈に固執しない経書解釈」という学問観が認められることを明らかにしている。

また、時代背景に関わる事柄として、清初の科挙政策が受験者間における朱子学の権威を復活させたことを検証している。かつ同時代人である黄宗羲・朱彝尊（1629～1709）・閻若璩の挙業批判を分析した上で、清初には一部の受験者に朱子学偏重という傾向が表れ、このような偏向が黄宗羲等の学問観と対立したことを明らかにしている。

本章では、更に毛奇齡と黄宗羲等との交流、及び学問観の共通性などを指摘し、結論として、毛氏の朱子学批判には、黄氏等と同じく、科挙の受験者における朱子学偏重に対する批判という意義が認められる、と結論づけている。

第三章 毛奇齡の陽明学評価と朱子学批判について—張烈との論争を中心に—

第三章では、毛奇齡における朱子学批判と陽明学評価との関連性について、朱子学者との対立という観点から考察を加え、併せて毛氏の所説の時代背景について論及している。

本章では先ず、毛奇齡が朱子学者である張烈（1622～1685）と陽明学評価をめぐる論争した、という記録が存在することに注目している。張烈によれば陽明学は異端の学問であり、かつ明を滅亡させた亡国の学問である。他方、毛奇齡によれば、陽明学は正統な儒学であり、かつ明の滅亡とは無関係である。本章は、張烈・毛奇齡の見解が相反することを明示しつつ、両者の対立が毛氏の朱子学批判において、朱子学の道統論の否定及び政治的効用に対する懐疑という形で具体化されていることを明かにしている。

また、本章では、同時代人の言説をも併せて検討することにより、清初における陽明学批判の流行を指摘した上で、毛奇齡の朱子学批判には時代思潮に対する反撥も認められる、と結論している。

第四章 康熙年間における陽明学批判の流行—熊賜履の影響力を中心に—

第四章では、清初における陽明学批判の流行の要因は何か、という問題を扱っている。当時の有力な陽明学批判者の一人に、熊賜履（1635～1709）という朱子学者が存在する。本章は熊賜履がしばしば科挙に関与したことに注目し、その影響力の実態を検証することにより、その言動が陽明学批判の要因となっていくことを明らかにしている。

本章は先ず、熊賜履の学術が科挙受験者に注目されたことを指摘している。次いで、熊賜履の科挙への関与の実態について検証している。具体的には、熊賜履が清朝において他に例を見ないほど科挙の試験官として重用されたこと、熊氏のみならず、その門下生もしばしば科挙の試験官を務めたことを明らかにしている。その上で、熊賜履等が陽明学に批判的であること、熊氏等の思想傾向が科挙の策問（論文試験）に反映したこと、答案作成の際の受験者心理などを分析し、結論として、試験官の思想傾向が陽明学批判の流行に大きな影響を与えた、と述べている。

学位論文審査の要旨

主査 教授 伊東 倫厚 (東洋哲学専攻)
副査 教授 佐藤 鍊太郎 (東洋哲学専攻)
副査 教授 三木 聡 (東洋史学専攻)

学位論文題名

毛奇齡研究

— 朱子學批判とその時代 —

一、本論文の観点

毛奇齡の朱子学批判については、梁啓超『中国近三百年學術史』第十二章第七節「毛奇齡」(中華書局、一九三六)から現在に到るまで、既に少なからぬ先行研究が論及している。ただし、清初という時代状況に照らして毛氏の所説を評価・検討する作業は、まだ十分にはなされていない。また、毛奇齡が直面した清初の時代状況そのものについても、不十分な点が存在するのが現状である。

以上の研究状況に鑑みて、本論文では毛奇齡の朱子学批判の時代的意義、及び時代状況の実態について考察しており、これは毛氏に関する先行研究における不備を補うものと言える。

また、本論文では、毛奇齡が挙業(科挙に及第することを目的とした勉学)に批判的であることに注目して、科挙の受験者に関する清初の時代状況を検証している。

科挙は旧中国の知識人に対して大きな影響力を有したと考えられている。にも関わらず、科挙と学術思想との関係に関する専論はまだ少ない。数少ない先行研究としては、佐野公治氏の『四書学史の研究』(創文社、1988)による明末の挙業受験参考書に関する考察、Benjamin A. Elman 氏の“*A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China*”(University of California Press, 2000)による明清の策問(論文試験)に関する考察、鶴成久章氏の「明代科挙における専経について」(『日本中国学会報』第52集、2000)による明代の専経、即ち受験者が『易』『書』『詩』『礼』『春秋』から一経を選び、経書解釈問題に答えることに関する考察などが挙げられる。

本論文が時代を清初(順治・康熙年間)に限定し、科挙の受験者の実態、及びそれに対する批判などを考察したことは、先行研究が十分に論及していない時期・主題を扱ったものと言える。

二、本論文の成果

本論文については、以下に列挙するように、主として三点の成果を指摘することができる。

①清初における科挙の影響力の検証

従来の清初学術思想研究においては、当時の科挙が受験者にどのような影響を及ぼしたのか、という点について論及されることが極めて少なかった。本論文は、同時代の資料を丹念に収集することにより、一部の受験者が朱子学偏重・陽明学批判などの傾向を有していたことを指摘している。そして、このような思想的偏向が生じた要因として、清初の科挙政策、科挙試験官の思想傾向、受験者心理などについて、様々な角度から実証的に考察を加えている。本論文は、清初の時代思潮に対する科挙の影響力について独自に検証したものと言える。

②清初における陽明学批判の流行の要因分析

清初における陽明学批判の盛行については、既に錢穆氏の「清初之朱陸異同論」(『中国近三百年学術史』第七章第二節、商務印書館、1937)など、先行研究のしばしば指摘するところである。ところが、なぜこのような時代思潮が生じたのか、という問題については従来十分な検討がなされていなかった。本論文はこの問題に関して、科挙試験官の思想傾向が受験者に影響を及ぼした結果、という一つの解答を、実証的に提示したものと言える。

③毛奇齡の朱子学批判の時代的意義

本論文では、清初の科挙政策や同時代人の所説などを検討することを通して、毛奇齡の朱子学批判には科挙受験者の朱子学偏重に対する批判が認められること、また、毛氏の朱子学批判には陽明学批判の盛行に対する反撥も見受けられることを指摘している。これらの指摘は従来の毛奇齡研究における不備を補うものである。

三、学位授与に関する審査担当者の所見

本論文は、毛奇齡の朱子学批判の由来する時代状況について、緻密な考察を加えた力作である。本論文の研究手法は着実で、資料の渉獵範囲も広く、その扱い方も厳密であり、豊かな研究成果を示している。もっとも本論文には、明末清初の出版文化と科挙との関係など、申請者にとって、多角的に考察すべき事柄も残されている。しかしながら本論文は、清初学術思想研究に新たな視点を導入したのものとして高く評価できる。

以上、述べた所に鑑み、当委員会は、本論文が博士(文学)を授与するに相応しい学術的価値を有するものであることを全員一致して認めるものである。